

Now

今

Revival Booklet Series No.7



リバイバルシリーズ No.7

メリケイ・マックリオド 著  
植田 正志 訳



SUNRISE MINISTRY





「国際連合部隊はイラクに進軍しています。国際連合によって建てられた新政府は、一ヶ月にも渡る反乱と暴動の後、崩壊してしまいました。この度、兵士たちはこの小さな国の暴動を鎮圧し、平和と民主政府を再建するためにぞくぞくと送られています」。

「大統領は英国・フランス・ロシアの各国政府の要人と共に、フランスのパリで平和条約に本日署名しました。このように、多くの政府の要人が平和条文に無条件に意見の一致を得たのは、歴史始まって以来のことです。このことは世界的平和への大きな飛躍とも言えましょう。」

「最高裁判所は本日、長い間論議されてきた日曜-安息日法案を最終的に通過させました。この法案は日曜日においてのみ、全ての人が礼拝を義務づけられることを要求するものであります。大統領はこの法案を承認し、フランスにおける平和会議の席上で、諸外国の主相に各国においても同類の法案を通過させるよう声明を発表しました」。

「それでは地方概況を、今週カラマーズにおいて・・・」。

テレビを消す私の手はほてって汗ばんでいたの  
で、スイッチが異様に冷たく感じられた。私は窓の方に無意識に歩み寄りながらブラウン先生が語った言葉をもう一度思い起こした。

「国家的日曜休業令が通過したら、クリスチャンは町を離れなくてはならない・・・」。

今まで聖書教理のクラスで日曜休業令や終末の事柄について何回も聞いてきたが、このことが実現するとは夢にも思ってみなかった。私はその時、全身の力が抜けてしまったような気がした。

私はブラウン先生が来る日も来る日も、終末に起こるべき事件を事細かに説明しながら、黒板にそのチャートを書いておられた姿を目の前に見ているように感じた。その時、連続的に起こる二つの事件があったのを覚えている。それは国家的日曜休業令と恩恵期間の終わりだった。

疑い、恐れ、興奮が胸中に入り乱れた。これから先どんなことになるのだろう。どこかに避難するとすれば、いつがいのだろう。

こんなことを考えてみたが、どれも非現実的で夢のように思えた。その時が今、ここに来ているという現実には私には信じられないほどであった。

「アリス、ご飯よ」。母が呼んでいる。

食事中、誰かが休業令のことについて話し始めるかと期待しつつ、ご飯が喉につまる思いで食事をした。私の緊張に反して、今夕の夕食はいつもの夕食と何ら変わらなかった。

聖書教理の時間に、私はこのような時が来たらどのようにしたらいいか、色々と思いを巡らしたことがある。私の父は時が迫っているので突然改心し、主にある一つの家族として、人里離れた所に避難するのだ・・・等と。

食事中、誰かが休業令のことについて話し始めるのを待っていたが、誰も何の変哲もなく食事を続けていた。もう我慢ができず、私は話し始めた。「最高裁判長はついに日曜休業令を今日承認したのよ」。



「本当？」。ロンは驚いた口調で言った。「世の終わりが来たのね」。母はいつも何か驚くようなことが起こった時、こう言うのであったが、その口調には真剣味がないのである。父は無言のままで聞いていた。

父も母もこのような生死にかかわる重大事件にどうしてあのように無関心でいられるのだろうか？

私はもう一度試みた。「エレン・G・ホワイトが日曜

休業令についてどんなことをおっしゃっているか知っているの？」。母は、また説教が始まったといった面持ちで私を見た。母は私が言うことを、特に最近は聖書やホワイト夫人のことを口にするると批判的になるのであった。

「どんなことを夫人は言っているの？」。母はまた始まったというような態度でため息をつきながら言った。

母の嫌気のさした態度を見過ぎて、私は説明を続けた。「ホワイト夫人は恵みの期間がすぐに閉じられるから、町や都市から避難すべきだと強調していらっしゃるのよ」。「どこへ行くの？」。ロンが言った。「どこか田舎か、人里離れた所よ」。私は答えた。「聖人さん、ちょっとお聞きしますが、この辺のどこにそのような場所があると言うの？」。

母の冷たい言葉は意外だった。母の反応は私が期待していたものとはまったく違っていた。

「北の方だよ」。ロンはすばやく言った。「そこには何週間も隠れることのできる大森林があるよ」。ロンは私と意気投合した。ロンがこんなにまで宗教的なことに関心を持っているとは知らなかった。彼はいつも無頓着で冗談ばかり言っていたが、今の態度から見ると、随分真剣そうである。

父と母の冷たい沈黙が重々しく感じられたので、これ以上話したくなかった。

その夜、私はベッドにもぐり込んで考えた。大変なことだ。なぜ、父と母はあんなに無関心でいられるのだろう。全てがどうかしているのだ。

あの日から一週間が過ぎ去ってしまった。

教会ではジェンキン先生が日曜休業令と恵みの期間の終わりについて感動的な説教をなさった。どの人もうなずいていた。人々は涙を流しながらアーメンと言っていた。私が期待していたように全てが動き始めたようだった。



けれども教会を出た時、人々はいつもの安息日のように笑ったり、冗談を言ったりしていた。ある人は、家の増築のことや最近買った新しい家具のことについて話していた。

婦人たちは、次のパーティーの時にどんなケーキを持って来ようかなどと話していた。

私には理解できないことばかりだった。人というものは、神のみ言葉にあれほど感動しながら、次の瞬間には何もかも忘れることができるのだろうか？

日が経つにつれて緊張はつのるばかりだった。ついに父と母は弟と私が湖の近くの小屋に住むことを許してくれた。

小屋で一応落ち着いてからは、日が経つのが早かった。安息日には終日学び、祈った。これまでにないほど、許しの必要を感じた。文字通り、何時間もロンと私は思い出せる限りの罪の許しを神に乞うた。何かじっとしてられないものを感じたのである。

日曜日には近所の人々と聖書研究をした。今まで聖書研究で人に教える立場に立ったことがなかったので、不安であったが、神に全てをお任せした。

私たちは、以前アドベンチストの信条を聞いたことのあるというクック家の人々に会った。バプテスマを受けてはいなかったが、聖霊のバプテスマによって真理を受け入れ、セブンスデー・アドベンチストになった。週の半ばに父母の家に帰った。

母はいつもと同じ調子だった。別に怒っている様子でもなく、子供に去られて不幸そうでもなかった。母は私たちが父だけを連れに来たのだと思っているようだったので、私は「そうではないのよ。お母さんにも来て欲しいのよ」と言った。母は別に動揺もしないで、この家も父も離れられないと言った。

私はジェンキン先生の所に電話して、もうすぐ町を離れるのかどうか聞いてみた。驚いたことに、先生の所でも今までと別に何の変わりもないようであった。いつものようにみんな良い人たちで、幸福そうであった。ジェンキン先生は、あまり熱狂的にならないように注意しなさいと私に言った。

どうして、こんなことになったのだろうか？なぜ、私は家族や友人たちに迫害されねばならないのだろうか。私が死んでからこんなことが起きればいいのに！

ある日、食事をしていると、クック夫人が飛び込んできて叫んだ。「聞いてよ！国際的日曜休業令が今、通過しましたよ」。「恵みの期間が閉じられてしまった！」。

わたしはクック夫人を見つめた。まさか、アメリカにおいて休業令が通過して、まだ数週間もたっていない七月の中旬だというのに。そんなに早く恵みの期間が閉じられるはずはない。今そんなことはあり得ないと思った。

ブラウン先生より教わったチャートを取り出してみたら、やはり日曜休業令と恵みの期間の終わりは、ほとんど同じ時に起きるように示されていた。

とうとうやって来た。来るべき時が来た。その時が今、来ているのだ。

スモーキー山に避難することに話がまとまり、共に祈り、小屋を去った。

私は父母やジェンキン先生に会わねばならないと主張したが、クック家の人々は大変危険だと言った。まず避難の場所を探さねばならないと言った。

私たちは高速道路を突っ走った。グリーンと白のサインが目に入った。



「カラマーズ出口 300 メートル」。それを見て何だか心が空白状態になったのを覚えた。

私の町、カラマーズを通過した。「私の家、家族、教会、牧師さん、さようなら！これから全てはなるようにしかならない」。私は車の後の席の反対側に座っている弟のロンを見つめた。いや、私は全てを失ってはいない。私には大切な弟のロンがいるのだ。近くにすり寄って、ロンの頬に軽いキスをした。

「とうとう二人だけになったのね」。と私は言った。弟のロンは私を見て言った。「二人だけではないよ！」。今度は微笑みながら、「僕たちには神様がついているんだ！」。

クック夫人はラジオのスイッチを入れた。私たちは車の中で時々ニュースを聞いたのであった。いつもと同じように戦争、龍巻、火事、犯罪、そして今問題になっている日曜休業令。

この日曜休業令を守らない者は殺される。あと一週間でそのような事態になるのである。

車の後の座席から飛ぶように過ぎていく美しい田園風景を目にしながら、過去を振り返ってみた。私の少女時代のこと、小学校の先生のこと、あの人たちは真理を受け入れたのだろうか？今、私たちが避難しているように、車に乗っているのだろうか？この人々に道を示す努力が足りなかった自分を思う時に心が痛んだ。

安息日学校の先生のことも考えた。いつもと同じ生活をしているのだろうか？最後の瞬間に、もしかしたら父と母は町を離れているかも知れない。「いや、きっとそうしているに違いない」。

ブラウン先生は、町を離れる信者は聖なる人々なのだとおっしゃったのを覚えている。私たちは聖なる人々なのだろうか？いや、ただこうして町を離れるために車を走らせて、私たちは聖なる人々だと思い込もうと努力しているに過ぎないかも知れない。もしかしたら私たちは救われていないかも知れない。しかし今、現に町を離れるために走っている。多分、天の神に、神の

印を受けるに価するのだと主張しているに過ぎないのかも知れない。

終わりには人々が嘘をつくことを習慣にして、ついには自分の嘘を信じるようになるのだということを聞いたことがある。私はその部類の人間なのだろうか？

こんなことを考えていると、恐ろしくなってきたので、もう神の御約束以外のことは考えないことにした。

「勝利を得る者には、神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べることをゆるそう」。

勝利を得る者は、第二の死によって滅ぼされることはない」。

神の約束は私の心に次々と光を与えてくれ、望みとなって燃えた。ロンは「キリストへの道」を読んでいた。彼は平安そのものであった。たった二ヶ月の間に彼は変わった。すっかり成長したようだった。

「ちょっと聞いてよ、お姉さん」。彼は言った。「ここにこんなことが書いてあるよ」。「我々はキリストの御約束を感情に頼らず、信仰によって受け入れなければならない。神はわたしたちを守って下さるのだから、そのことを信じなければならないと書いてあるよ」。私が特に必要としている言葉をロンが読んでくれたのは不思議だった。

何時間も過ぎてしまった。ニュースは相変わらず、戦争・大都市の暴動暴徒でにぎわっていた。疫病は諸外国に流行していた。

ついにスモーキー山脈のふもとにたどりついた。私たちにとってそこは天国であった。ガソリンが切れたので、満タンにするため、ガソリンスタンドに車を止め、手足を伸ばすために車の外に出た。



スタンドの人が車の窓を拭いた後、私たちに売買の許可証を持っているかどうかを聞いた。私たちが許可証を所持していないことを告げると、急に顔をこわばらせ、事務所に走り込んで電話を手に110番を回した。私たちは車に駆け込んで、走って、走って、走りまくった。ガソリンのメーターはゼロなのに車は走った。坂を登り、坂を下り走った。ラジオのスイッチを入れて、息を殺して聞いた。

突然、臨時ニュースに私たちの車とライセンスナンバーが発表された。この車に乗っている者は危険犯であるというのである。

初めは私たちのことを言っているとは夢にも気がつかなかった。このアメリカで、どうしてこんなことが起こり得るのだろうか？信じられない。

「さあ、よく聞くんだよ」。クックさんが言った。「持てるだけのものを持って、ここから出るんだよ。できるだけ早く安全な場所に逃げなさい。あまりびくびくすると疑われるからね！もう私たちと一緒にいると危険だから」。

「けれどクックさん」。

「今言った通りにするんだ！いいね！」。

車が止まった。私たちは飛び降りた。

しばらくの間、聖書と洋服を手に持ってそこに立って、これから先どうしたらいいか、考えをまとめようと努力した。私はローラーバックを持っていた。「なぜこんな時にローラーバックを手にしているのだろう」。私は神経質にククッと笑った。

「そんなことはどうでもいいよ、早く行こう！」。ロンは私の腕を捕まえた。

静かな住宅街を急いで歩いた。子供たちはいつもと変わらず遊び、人々は家の窓を洗ったり、芝生に水をかけたりしていた。瞬間的にはあるが、何もこんなに急いで隠れたりしなくてもいいじゃないかと思った。全て目に写るものは平和そのものだからであった。

その時、サイレンの音がした。私たちはレンガの建

物の間にある小路に飛び込んだ。そこに暗い所があって、いくつかの樽や箱が置いてあった。このような住宅街になぜこんな物があるのだろうか？

「アリス、今こんなこと考えたって仕方がないよ。早く隠れよう！」。ロンは私を箱の中に押し込んで、悪臭のする薄汚い毛布を頭にかぶせた。少しためらってから、ロンは私の手をしっかりと握って言った。「大丈夫だよ。ローマ8:28を忘れないで！」。箱が崩れた。それから全く静かになった。ほこりと毛布の悪臭には耐えられなかった。

私は真剣に祈った。救いの確証が欲しい。私は救われているのだろうか？

ロンが出てもいいと合図したので、窒息死するかと思えた箱の中から這うようにして出た。外の空気はおいしかった。「もう夜だよ」。ロンは私の手を取った。神にお守りを感謝して、また路地を歩き始めた。

高速道路に沿って歩いたが、町から離れるにしたがって、だんだん寂しくなってきた。自動車が通り過ぎる度に地面に伏した。それから急いで起き上がり、走った。誰も私たちを見ていないだろうかと辺りを見回しながら走った。途中で転んだりしたので、横腹や足がひどく痛んだ。

「ちょっと待って！もうだめだよ」と言ったかと思うと、また一台の自動車が来た。また地面に伏して身を隠した。冷たい地面を頬に感じながら、ヘッドライトの光が目の前を照らして通り過ぎるのを見守った。

犯罪者とはこんなこともしなければならぬのだなと思った。追われる身とはこんなものかとも思った。

もう起き上がる力もなく、そこに伏したまま、じっとしていたかった。

「起きろよ、アリス！」。ロンは私を無理やりに立たせた。

「ロン、私はダメ」。本気になって言った。

「何言ってるんだ！まだ行かなくてはならないんだよ！今ここで寝てしまったら、太陽が昇ってきて見つかるじゃないか。もう少しで丘のふもとだから頑張るんだ！」。ロンは私を引きずるようにして引いていった。

「今行かなくてはだめなんだよ！」。

そうだ、何でも、今、今、今。今走れ、今伏せろ、今隠れろ。なぜ来年か、あるいはいつかこんなことが起きないのだろうか？なぜ、今でなくてはいけないのだろうか？

とうとう丘の中腹に辿り着いた。そして、森の深みに入って行った。

東の空がピンク色に変わり、夜が明けた。歩き続けた。もう足や横腹の痛みも感じなかった。足にできたマメも何も感じない。麻痺しているようようだった。

水が飲みたい、のどが渴いたと思っているうちに疲労が私たちの身体全体を一挙に包んでしまった。地面に伏して寝た。

目が覚めた時、聖書を開いて詩篇 27 篇を読んだ。そこには線が引いてあった。

「主はわたしの光、わたしの救いだ・・・わたしはだれをおじ恐れよう・・・それは主が悩みの日、その仮屋のうちに私を潜ませ・・・たとい父母がわたしを捨てても、主がわたしを迎えられるでしょう」。



そこで目を上げて考えた。どうしてこんなことがあり得よう。聖書を開くとすぐに私にぴったりの聖句が出てくるのは不思議で仕方がない。私の心は神の愛を感じた。ヨハネ第一の手紙 3 章を開いて読んだ。

「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんな

に大きな愛を父から賜ったことか、よく考えてみなさい。わたしたちは、すでに神の子なのである」。

神の子、私は神の娘なのだ。宇宙の王国の王女なのだ。このようなことを考えていると足の痛みも全然感じなかった。天の王宮の家族として、今の苦しみを受けているのだと思った時、痛みはどこにも感じなくなった。

また、夜が来た。静かな夜であった。私たちは山の中に入った。

「ロン、今日は何曜日？」。私は聞いた。

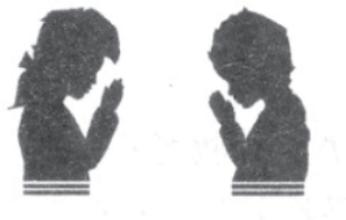
「金曜日の夕方だよ。安息日だよ」。ロンは答えた。

一週間はとても早く過ぎてしまった。ロンの口調から、彼がニコニコと微笑みをたたえて話しているのが目に見えるようだ。嬉しそうだ。

「ここでベスパーをしよう」。

そこで静かに礼拝をした。力づけられ、また、急ぎ足で山を登った。

あと24時間で、私たち同信に者に対する死刑の執



行が始まるのだ。けれど、私たちはもう山の中にいて安全だ。

夜明けが近づいた。安息日の朝、山から日の出を見ることができるとはスリルに満ちたことであった。東の空を眺めた。二人とも日の出の美しさにみとれていた。そこで、ひざまずいて、神の愛に感謝せずにはいられない気がした。

立ち上がったかと思うと、後の方で叫び声が聞こえた。振り向くと、二人の男がライフル銃を手にして、犬と一緒にこちらに向かって来るのが見えた。

「オイ！お前たちはここで何をしているんだ」。恐ろしい声でどなった。

「逃げよう！アリス」。ロンは私を押しやって、反対の方へ逃げた。

「私を強くして下さる方によって何事でもすることができる」。

ロンが私を呼び返している声を聞きながら、反対の方へ逃げた。私は盲めっぼうに走った。後の方で犬が吠えている。男たちはどなりちらし、犬は狂ったように吠えている。私は走った。横腹が痛む。のども痛い。苦しい。また走り続けた。犬が追いかけて来る。

「神様、お助けください！」。私は叫んだ。「バン！」。一人の男が発砲した。急に体が固くなった。けれど痛みは感じない。「バン！」。また撃った。まだ当たっていない。私は走り続けた。犬は追いかけて来た。

「神様、捕まらないようにしてください！」。

「どうしてももう少し早く走れないのだろう。」。転んだ。起き上がろうとした。もうだめだ。犬が私に飛びかかって来た。その後に二人の男たちが立っていた。

男たちが私に近づくと、犬は攻撃を止めた。座ったまま、怖い顔をした男たちをおそろおそろ見上げた。私は髪の毛の乱れを気にした。

その時、一人の男が私にねらいを定めた。

「もう終わりだ」。と私は思った。

引きがねを引こうとしている。

「オイ、死刑執行法案は明日から有効なんだぜ！」。一人の男がその男の腕を捕まえた。

「遅かれ早かれ、どっちみち殺される身なんだ。やっちまえ！」。

「警察に連れて行こう。みんなはそうしているよ。」。

「明日になれば、いくらでもハントできるじゃないか」。男たちは笑いながら腕をつかんで、軽い私の身体をグイと引き上げた。

「もう一匹逃がしてしまった」。男は残念そうに言った。

「明日には捕まるよ」。

ロンは逃げた。私は感謝のお祈りをした。



刑務所では質問を受け、なつ印を押し、記録され、写真をとられ、また質問を受け、囚人服を着せられ、地下の部屋に入れられた。

部屋に入ると同居人が私を見上げた。

「ようこそ、お嬢さん」。一人の男性が笑顔で迎えてくれた。好感のもてる人だ。

「お座りください」。もう一人の人が床を指差して言った。

「私たちは今礼拝をしていたところなんです」。私は座った。嬉しかった。居心地は大変良かった。同居人は全ていい人たちばかりだった。

「あなたは私たちのお客様よ」。一人の婦人が言った。

「もしサイン帳があれば、サインをしていただくのですが、残念です」。

礼拝は簡単だった。讃美歌をたくさん歌った。今までにないほど心を込めて歌えた。以前歌っていたような形式的な歌い方ではなかった。その後、祈った。

日が経つにつれて、私たちは歌い、かつ祈り、語った。一人の男性はにこやかに次のような証をした。彼を捕らえた男が発砲しようとしたが、弾が出てこなかったというのである。

私は私の場合を考えた。なぜあの男は二発もミスをしたのだろう？なぜ三度目を撃たなかったのだろう。

トム - その男性の名である彼は、私が部屋に入るとすぐ笑顔で、お嬢さんと呼んで、私を歓迎してくれた親切な人であった。私は彼をトムと呼んだ。彼はトムしか教えてくれなかった。

トムは他の人よりどこか違っていた。親切でいやそれ以外に何か彼をそうさせているのだった。ネリーおばさんが、サインのことを話した婦人であった。私は少し空腹を感じた。「食事はくるの？」と私は聞いた。

「来ますとも」。トムはまた笑顔で言った。「時々ね」。

「アリス、あなたは前、やせるための断食をしたこ

とがあるでしょう。だから大丈夫、それと同じですよ」。私はそれを聞いて考えた。私は今までキリストのようになることの意義を何回も聞いてきた。しかし、キリストを反映することを知らない者だった。罪の告白も忘れていた方が多いし、ああ、私は確かなことを知りたい、確証が欲しい！

トムが私のそばに来て座った。

「失望してはだめです、お嬢さん。すべての事は今わからないのですよ」。

彼の声の調子は穏やかであり、私を完全に理解してくれていた。なぜ、私の心の動機がわかるのだろう。トムは続けた。「どんなことがあっても、神の愛はいつまでも同じように強く迫って来ているということを忘れないで下さい。決して神はあなたを見捨てるようなことはなさないのですよ。このことは信じて下さい。決して見捨てるようなことはなさない」。

私は彼を信じた。いや、信じざるをえなかった。トムは私の心に信頼と神の愛を吹き込んでくれる力を持っていた。

「キリストはこのような苦しみ、いやもっと大きな苦しみをあなたのために受けられたのです。キリストはあなたが受けている苦しみも失望も痛みも全て受け

られたのです。キリストはあなたの叫びをいつも聞き、あなたを見守り、愛しておられるのです」。彼は立ち上がる時、また、こう続けた。「あなたは良い兵士です。完全な王女です」。

どうして私が王女、すなわち神の娘となったことを知っているのだろうか。私はいつかそんなことを考えたことはあるが、誰にも話したことはない。トムは私の心まで読めるのだろうか？ トムがいったいどんな人であるのか考え始めると何だか怖くなってきた。その時、トムは私の方を振り向いて微笑した。トムがただ素晴らしいクリスチャンであった。

部屋のドアが開いて三人の方々、男の人、婦人、少女が入ってきた。少女の名はジュディと言った。彼女は大変おびえていた。ジュディは泣きじゃくっていた。両親が恋しいのであろう。しかし、トムがすぐにジュディをあやして笑わせた。

何時間か経って、看守がおわんの中にぬるま湯をいれて持って来た。看守はこれを野菜スープと言った。おわんを洗った後、看守はあざけるような調子で「あと4時間だ」と言った。私たちはこの意味をよく知っていた。ちょうど8時だから、死刑命令が効力を発揮するまで、あと4時間というのである。

「家族のことはちっとも心配しないのかい？ 家族の

者もお前たちのおかげで迫害されることを知らないのかい？」人の品位を傷つけるような調子で言った。

私が法律を犯したら苦しむのは家の人たちなんだ。彼の言葉は痛かった。父母は私のために傷つけられているのだろうか？

「その上、お前たちが聖人であるという考えが、どこから湧いて来たのか言って欲しい。お前たちを除いて、みんなこの法律に不服はないんだよ。神に対してそんなことをするお前たちは、いったい何者なのだ。全くあきれたやつらだよ。お前たちのような者を気遣いと言うのだよ。動物が狂ってきたら射殺されるのがおちだ」。彼は去って行った。部屋の空気は重々しかった。

夜がふけてくると、ぞくぞくと人々が捕らえられ、私たちに加わった。ある人々は私たちのようにピンピンしていたが、残り的人々は撃たれ、血を流していた。立っていることさえできないほど、人で一杯になったが、看守はもっと多くの人々を押し入れた。疲れたので眠ろうとするのだが10分から15分おきに大きなブザーが鳴った。トムはあのブザーは私たちに眠らせないで立っておくようにするためだと説明した。トムはできるだけ眠るように努めなさいと言っていた。看守は極度の不眠によって私たちに苦しめようとしているのだ。イエス・キリストを信頼して祈りなさい。神は守っ

て下さいますと言った。

ジュディはまた泣きじゃくった。ネリーおばさんがジュディを抱いて歌を歌ってあやしていた。この少女は本当に可哀想だ。他の子供たちはどうしているのだろう。私たちと同じように苦しまねばならず、ただ面倒を見てくれるのは、ネリーおばさんやトムのような人たちだけなのだ。

真夜中にブザーが鳴った。看守が入って来た。何人かの人々の名前を呼び、連れて行った。部屋は少し空いて来たが、安全性は少なくなって来たように思えた。



二日間、頭上の電灯はまぶしいほど照りつけた。水も食物も与えられなかった。この間私たちは讃美歌を歌い、祈った。聖書がないので、暗唱聖句を口にした。もっと知っていれば良かったのにも思った。看守が来てトムと他の人々を連れて行った。トムが出る時、ジュディに何か手渡した。

「もうこわがることはないよ」とジュディに言った。私の方を見て、「ジュディをよろしく」と言って出て行った。ドアがガチャンと閉まった。

トムがくれた物を見て、「きれいだわ！」とジュディ

が喜んで言った。ジュディの手には美しい色彩で描かれているイエスの絵があった。その絵の裏には神は愛なりと書いてあった。入所する前に身体検査を受けたのに、どうしてあんなものを手にしていたのだろう。彼のやさしい顔つき、言葉、慰めなどを思い起こした。また、みんなで歌った。ジュディも知っている歌詞、またメロディーのところに来ると一緒に歌った。彼女はもう泣かなかった。お腹が空いた。しかし、それよりも苦しいことは、私が救われていないかも知れないという考えを持つことであった。私には自信がなかった。

看守が入ってきて名前を呼んだ。私もその中の一人であった。ジュディがまた泣き出した。「ジュディ、泣くのをやめて、いい子だから。トムがくれたあの絵をいつも見ていなさいね。さようなら」。彼女は満足したようだった。私が行く時、手を振っていた。ジュディは幼い子供であったにもかかわらず、主は彼女に愛とお守りを約束された。

今まで出て行った人々はどうなったのだろう。私はどこに行くのだろう。少し怖くなった。小さな部屋に連れて行かれた。一人の男が大きな机の向う側に座っていた。

「お前はアリス・ストロングだね？」。



「ハイ」。

「ミシガン州のカラマーズに住んでいるのか？」。

「ハイ」。

「セブンスデー・アドベンチストだね？」。

「ハイ」。

「なぜ？」。

「私は聖書を信じています。そして、セブンスデー・アドベンチストは聖書の真理に基づいての信仰を持っています。私はこの信仰を持つがゆえにアドベンチストなのです」。

こんな答えができたのも不思議であった。決して名文句ではなかったが、正しいことだけは確かだった。

「よろしい、聖書を信ずると言ったけど、聖書の中に示されている霊魂不滅の真理を信じないではないか？」。男は用紙をめくりながら言った。私は何かを言おうとしたが、黙って聞くようにという意味の動作をしながら続けた。

「聖書の中のラザロは天国に、富める人は地獄に、

死んだ後、行ったと示されている。これは真理である。また、イエスは十字架上の男に今日、パラダイスに行けると言われた。イエスが死なれたその日にパラダイスに行けると言われた。それゆえ、霊魂不滅の真理は正しい。そうだろう？ そうなのだ」。

「もう一つ安息日問題だ。安息日は旧約の真理であって、イエスが復活された時から聖日は土曜日から日曜日に変えられたのだ。聖書を信ずると言っているが、この二つの真理すらも間違っていて信じているではないか？ まだまだこのようなことがたくさんあるのだ。君は神の御旨に従っているとやったが、全く反対のことを言っているのだ。私が言ったことを考え直して欲しい」。

「君は君の間違った信仰の故に友人も父母も苦しめ、殺しているのだよ。君に責任があるのだ。もしここで考え直すなら、神は君も家族も救われる」。

長い沈黙が続いた。

「今、決断するのが難しいのはよく知っている。しかし、もし君がそうしたいのならカラマーズに、家族のいるカラマーズに帰してあげる。いいかね？」。私はうなずいた。「私ができることをしてみよう」。彼は言った。

小さな部屋に入れられた。家に帰れるその日を待ちこがれた。しかし、何週間も経ってしまった。5、6分毎に看守がまどろむ私を起こした。尋問、説得が続いた。私は気が狂いそうになった。

私は二つの聖句をよりどころとした。「わたしを愛するならば、わたしのいましめを守れ」。「ここに、聖徒たちの忍耐がある。イエスの証と戒めを守る者は幸いである」。「強く雄々しくあれ。わたしはあなたを決して見捨てない」。突然、私は目覚めた。長い間眠っていたようだ。看守が部屋の中にいる気配がした。「トム、トム、ここで何をしているの?」。部屋にいたのは看守ではなくてトムであった。トムは以前の部屋にいた時よりもきれいに身づくろいをしていた。ひげもちゃんと剃っていた。

「心配無用!」。トムは微笑んだ。トムがいる所には平和があった。飢えも渴きも苦しみも忘れられ、部屋全体に喜びの雰囲気のみなぎるのだ。

「あなたがひもじいと思って、何か食べ物を持って来ました」。それを口にした時、驚いた。おいしい、今まで口にしたことのない食物であった。

「これは何という食物ですか?」。私は聞いた。

「サー、何と言おうか。この食物には名前なんか

ありません。お気に召して感謝です」。また、彼は微笑んだ。

「それより、ジュディはどこにいますか？別れる時、元気でしたか？」。

「そのようでした」。私は答えた。

「お嬢さん、これからあなたは家に帰るようになりますが、以前よりもっと苦しいことが待っています。決して嬉しい再会ではありません。あまり長くはこの苦しみは続きません。キリストがあなたにして下さったことを一つ一つ数えてこの苦しみを切り抜けて下さい」。

トムの目はやさしく、また権威があった。神の近くにいた者のようであった。

「これは、一つの試みに過ぎません。天国への試験のようなものです。ただ、祈って神の約束を信じて下さい。自分に頼らないで下さい。キリストの力と愛を信じて下さい」。

「トム、私はトムのようにになりたいわ」。私は叫んだ。

「私のようになることを考えないで、キリストに似ることを考えて下さい。キリストより素晴らしいお方はありません」。彼はやさしく、権威ある調子で言った。

「私に、決して失望しないと約束して下さい。それではこれで失礼します。キリストがどれだけ愛して下さいかをお忘れしないで。さようなら」。

「行かないで、行っちゃいやー！」。私は泣き叫んだ。

「私を一人にしないで。あのいやな看守を見るのもういやです」。

「わたしは行かねばなりません。また、きっと会えます。すぐに！」。私に背を向けてトムは行ってしまった。

「トム！トム！」。私は叫んだ。

「やかましい！」。看守はどなった。

とうとう私は故郷のカラマーズの刑務所に送られた。手続きを済まし、今度は大きな部屋に閉じ込められた。

「アビーさん」。私は高校の同級生のアビーに会えて嬉しかった。

「どれくらい？」

「一ヶ月くらい」。

「大変だった？」。

「そう、だけど、お祈りしているからそうでもなかったわ。」

「高校はどうなっているの？何かニュースある？」

彼女はうなずいた。

「ブラウン先生は？」。アビーは首を横に振りながら言った。

「ブラウン先生はとうとう立ち上がらなかったのよ」。

「どういう意味？」。

「みんなと同じように休業令に従ってしまったの」。

「まさか！そんなことがあるものですか？」。私はブラウン先生のことを信じられなかった。聖書教師のブラウン先生がそうであったとは信じられなかった。

二日経って、看守は私を法廷に連れ出した。そこには母、ブラウン先生、ジェンキン牧師がいた。着席して質問が始まった。前の質問と同種のものであった。この度は、何人もの人々が変わるがわる私に質問しては着席した。ざっと数時間かかった。私は疲れた。これで終わりと思ったら、ジェンキン牧師が立ち上がっ



た。

「アリス、こんにちは。私は今日の午後、ずっとあなたの質問に関する答えを聞いていました。あなたが間違っていることは、もうすでにわかっているでしょう？」。

これを聞いて私の心臓は止まった。これが私の教会の牧師さんだろうか？あり得ない。こんなことをどうして平気で言えるのだろう。

「信ずることは難しいことは私も知っています」。彼は続けた。「私たちは新しい光、幻の中にイエス様は計画を変更なさったことを述べられました。日曜礼拝によって、全ての人を正義に導き、一人も滅びないようにして下さるのです」。

息のつまるような驚きをもって、私はジェンキン牧師を見つめた。

「アリス、この意味がわかりますか？全ての人が救われるのです。全ての人が」。

ジェンキン牧師は本当に信じていることを話しているようだった。

「アリス、イエス様の救霊の働きを妨げているのは、あなたのような人たちですよ」。

私の牧師も変わったものだ。どうしてそんな気になったのだろう。次にブラウン先生が私の所に立った。ブラウン先生も私を苦しめるのだろうか？私はそう思うと前の刑務所に帰りたくなった。

「アリス、会えて大変嬉しい。もっと異なった条件の場所で会えるともっと良かったのだけど」。きっとした顔つきで言った。

「私にもわからないからはっきりと言えないが、あなたは失われているかも知れない。つまり改心をしないと救われれないということだ。アリス、あなたは学校で問題を何回も起こしましたね。覚えていますか？どの場合もあなたが正しいと思ってしたことですが、あなたは間違っていました。そして結局、罰を受けましたね。今もそうです。アリス、あなたは今、正しいことをしていると思ひ込んでいますが、実際は間違っているのです。今、考えを変えなければ、罰を受けることになるでしょう」。

これが、聖書を教えてくれたブラウン先生だと思つた。と悲しくなった。たった二ヶ月前までクラスで聖書を教えてくれた先生なのに！外見は変わっていないが、内部の心に変化があったのに違いない。

次に母が歩み寄って来た。冷たい表情である。

「お父さんは処刑された。一週間前に。お前のおかげで殺されたんだ！お前はクリスチャンではない。お前は間違いだ。お前がお父さんを殺した」。母は燃える怒りを嫌悪で全身を震わせていた。

「お前は私の娘ではない、娘ではない」。母は震えながら退いた。

私は三人を見渡したが、三人とも知らない人のようであった。聖書の時間にブラウン先生は、ごく少数の限られた者しか救われないと教えて下さった。まだブラウン先生の声が聞こえるようだ。「聖徒だと思っていた人々が、実は悪魔そのものであることがわかる時が来る」。

今そこに座っている先生を見ると、あのクラスの預言は、実は自分自身の預言だったのだということがわかった。どこかで、20人中一人しか救われないという言葉を読んだことがあるのを思い出した。20人の中の1人、それは私の友人たち、弟のロンもその中に含まれているに違いない。

「さて」。裁判官は私を見て言った。

「私たちは、必要以上の恵みをあなたに与えた。あなたは国の法、教会の掟、神の律法を犯している」。辺りはシーンとして沈黙が続いた。全ての人々は私を見

つめている。誰も私の信仰を曲げることはできない。

「さあ、あなたの答えをお聞きいたしましょう」。

「私は聖書の真理に基づかない法律に服従できないことを幸いに思っています」。私は裁判官を恐れず直視した。もうどうなってもいい、私の信仰は曲げられない。

「しかし、私は言ったではないか、聖書はもう必要ではないのだ！」。ジェンキン牧師が叫んだ。

「バカ！お前がしていることがわからんのか！」。

私は母、先生、牧師三人を可哀想に思った。この場合、血族関係、教会関係も意味がない。ただ、神のみを信ずるほかはないと思った。

「それでは皆さん、私はここでアリス・ストロングの死刑を宣告致します。電気椅子にて明日正午死刑の執行を致します」。裁判官は怒りに満ち、もうたくさんだという調子だった。

私の三人の友人たちは去った。私は暗い独房に入れられた。

私は救われているのだろうか？生命の書をのぞいて見たい。ブラウン先生は、私が間違っているとやった。許し、許しが必要だ。日夜許しを求めた。一つ一つの

罪を思い起こそうとしたが、記憶はよみがえらなかった。イエスにお会いする準備ができていれば、死は私にとって何の意味も持たない。もうすぐ死刑の時がくる。神の印、神の印が欲しい。

電気椅子に座らせられた。頭に何かの装置をつけられた。死刑執行係の男がスイッチに手をかけた。

「イエス様、私を憐れんで下さい！！」。

「最後に言うが、決心を変える気はないかね？」。スイッチマンが形式的に言った。

体全体がしびれる気がした。突然ものすごいショックが全身を突っ走った。電気が消えた。地面がぐらぐら揺れ始めた。建物が揺れ始めた。床は上がったりがったりした。私を縛りつけていたバンドが切れたので、椅子から飛び降りた。全部の窓という窓は壊れ、すごい音を立てて、ガラスが飛び散った。雷、閃光、どうしたのだろう。どうしたらいいのだろう。

「世の終わりだ！」人々のわめく叫び声が聞こえた。

「滅びだ、滅びだ！」。

私は外に出た。以外にまわりの変動、騒音、災害にもかかわらず、気持ちは安定していた。

至る所、あちらにも、こちらにも人々が走り回っている。狂ったように走っている。倒れた人を踏みつけ踏み越え、互いに殴り合い、殺し合い、どうにかして自分を救いたい、救われるためには、逃げるためにはどんな手段もかまわない。まぶしい光、天からの光から逃れ、救いを求めているのだ。私にとって、天からの光は、美しい平安と希望の光であった。

地上はうねり狂う海のような。大きな裂け目が口を空けた。人々は救いを求めるように暗い、深い裂け目にすすんで飛び込んでいった。至る所、火、火、火の海だ。空はまた暗くなったかと思うと、まばゆいばかりの閃光が暗黒の空を突っ走った。暗黒の中央に小さな光があった。

これらの光景を吸い込まれるように眺めていると、中から希望が湧き、喜びに満たされた。言葉に表現できない喜び、遂に、とうとう、イエス様が、主が来られた。主は来ませり！

痛み、苦しみ、悲しみ、失望、こんなものは過去であったのだろうか？ 飢え渴きもあったのだろうか？

今、知っていることは、天の故郷に帰っていくことだけだ！

急に静かになった。

道端には私を含めて数人の人々しか立っていない。光り輝く雲が近く近く、私の方に追ってきた。そして、とどまった。

イエス様は釘あとのある御手を上げて、眠っている人々を呼び起こされた。

突然、地面が割れて何百という栄化された人々が出て来た。勝利の叫びが長く続いた。私も叫んだ。何という勝利なのだろう。千々万々の天使たちも地上に近寄ってきた。よみがえった人々は空中に上げられた。天使たちはもっと近づいて来た。私たちは待った。天使は喜びに満ちていた。

私の守護天使は私の横に来た。イエスのおられる方に昇り始めた。私は辺りを見渡した。

「ロン！」。弟のロンがいた。天使と共にいた。ロンと天使は私たちの上の雲を突っ切っていた。クック家の人々やもっと多くの知人もいた。何というスリル、奇跡的栄光！栄光の奇跡とでもいうのであろうか？イエスと一緒に天の住家に帰っているのだ。

「トムは正しかった」。天使が私の腕をとって言った。「お嬢さん、良かったね」。

「トム、おおトム」。私の胸は喜びで張り裂けるほどであった。けれど、トムを長く見てはおられなかった。トムよりももっと美しいお方が目に入った。愛といつくしみとに満ちておられるお方、イエス・キリスト。私たちが主の近くに行くと、主は素晴らしい、愛に満ちた面持ちで私を迎え入れて下さった。主の御顔は美しく、栄光に満ちていた。

主は来ませり、私は幸福そのものであった。

今、今、主は来ませり！



今 -リバイバルシリーズ-

---

※頒布価格 100 円

発行 平成 24 年 1 月 16 日  
著者 メリケイ・マックリオド  
発行所 サンライズミニストリー  
〒 905-0428  
沖縄県国頭郡今帰仁村今泊 1471  
電話 0980-56-2783  
FAX 0980-56-2881  
Email [info@sunriseministry.com](mailto:info@sunriseministry.com)  
[www.sunriseministry.com](http://www.sunriseministry.com)

---

もっと詳しく研究なされたい方のために...



## “スタディバイブル”



口語訳  
解説付き聖書  
各 10,000 円

標準型 (幅 153mm、高さ 220mm、厚さ 38mm)  
余白付大型 (幅 165mm、高さ 235mm、厚さ 38mm)

難漢字ふりがな付き。上質の合成皮革。  
E. G. ホワイトの注解、脚注、引照付き、地図、  
チャート、金のりんご、聖書語句索引、口語  
訳聖書の標準ページを左右余白に付記。

お問い合わせ、お申込みは下記の連絡先まで

サンライズ ミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊1471

TEL(0980)56-2783 FAX(0980)56-2881

info@sunriseministry.com

www.sunriseministry.com



# リバイバル小冊子シリーズ

---

No. 1 安息日問答

No. 2 アピール

No. 3 装身具について

No. 4 狭き道の旅

No. 5 リバイバルと改革

No. 6 神の聖安息日の遵守

No. 7 今

No. 8 終末時代における霊の賜物

No. 9 小さな光と大きな光

No. 10 預言の霊に関する指導原理

No. 11 サタンのわな

No. 12 人類が直面している世界情勢

No. 13 田舎の生活

No. 14 十戒

No. 15 主のぶどう園

No. 16 背教のアルファ

No. 17 終わりの時に備えよ

No. 18 どのようにして安息日を守るのか

No. 19 キリスト論

No. 20 救いの確証

No. 21 もうひとつの箱船

